

The PROFESSIONAL WEDDING

[ウエディングプランナー サポートマガジン]

No.64

OCT-NOV 2020

5 From the Publisher 「無駄を省いて残るもの」 石渡 雅浩

6 連載「ウエディングプランナーが花嫁になる日」
(株)ディアーズ・ブレイン 徳永 彩奈さん

10 連載「オモイがカタチに変わるトキ」
(株) LES VOUS 代表 VOUS BRIDAL
ウエディングプランナー 鶴野 時咲子さん

14 連載「good things make the day brighter」
ギフトコンシェルジュ 真野 知子

15 特集 主要メディアが行なうサポート 2021

16 総論 多様化が進むウエディングメディア

18 「ゼクシィ」 早川 陽子氏

20 「マイナビウエディング」 西 宣秋氏

22 「Hanayume」 常深 香里氏 鈴木 悠介氏

24 「ウエディングパーク」 房 紘士氏

26 「エニマリ」(みんなのウエディング) 堀口 育代氏

28 「IBJ wedding」 矢田 泰子氏

30 Editor's EYE ～「HIKADY」 中野 裕美氏

32 連載「Wedding with ART
～アートがあれば、ウエディングはもっと楽しく」
(株) UNO Design 代表 宇野 雄一

34 TOP INTERVIEW
(株) スティールアン 執行役員ゼネラルマネージャー 鈴木 達也氏

38 GOOD WEDDING AWARD 2020
グランプリ&準グランプリ受賞者に聞く
グランプリ受賞 (株)エスクリ ラグナヴェール アトリエ 飯田 宏美さん
準グランプリ受賞 (株)ディアーズ・ブレイン 麗風つばシーズンズテラス
芳賀 恵理さん

— SKILL UP —

44 連載「未来をつくるウエディングプランナー～人生を変えた結婚式」
ヴィーナスコート長野 宮川 瑛里さん

46 連載「教えて有賀さん! 結婚式の価値の深め方」
第7回: 記録ビデオ
(株)テイクアンドグヴィ・ニーズ ウエディングアドバイザー 有賀 明美さん

48 連載「明日から使える教養講座」
レッスン 28: ゴスペルというメディアに学ぶ、教養の広げ方
(株)エスプレシーボ・コム 代表取締役 安東 徳子

50 連載「荒井さやかの 新規接客はもっと楽しくなる!」
第15回: ふたりのインサイトを引き出す、新しい質問
Coco style WEDDING フリーウエディングプランナー 荒井 さやか

52 連載「ウエディングと音楽のチカラ」
Vol.13: こんなに面白い生演奏の世界
フリーランス・ウエディングプランナー 岡村 奈奈

54 連載「支配人とプランナーのための WEB 集客講座 part2」
第4回: “勘”に頼らない!
商戦期に向けた撮影マニュアルその2
SoZo (株) チーフコンサルタント 武田 昌幸

— CAREER —

56 連載「THE PROFESSIONAL ～ドラマは現場で起こっている」
マイプリント(株) デザイナー 太田 飛鳥氏

58 連載「輝け! フレッシュパーソン～ under25 奮闘記」
(株) 洩上ファインズ (Dress the Life) 木下 優希さん

60 連載「両立 WOMAN」
第63回: (株)スティールアン ミュゼ四ツ池 仁藤 奈甫子さん

63 連載「ココロとカラダの保健室×美人化計画 For Wedding WOMAN」
診療放射線技師・一般社団法人美人化計画理事 松浦 由佳さん

64 ディレクターズインタビュー (株)テイクアンドグヴィ・ニーズ 野上ゆう子氏

— REPORT —

66 連載「WORLDWIDE WEDDING」
第63回: フィジー共和国

68 データ「データから見るブライダルビジネス」
第57回: コロナ禍のブライダルマーケット

72 TOPICS

78 INDEX OF PERSONS

81 桑田和代のおすすめ BOOK

82 連載「うちのイチ押し料理」 The Place of Tokyo
ウエディングコンシェルジュ 湧口 晴香さん
グランシェフ 大澤 亮氏

84 新設・リニューアル情報
富士屋ホテル/フォーシーズンズホテル東京大手町
ホテル雅叙園東京衣裳室

88 Pick Up! (株)八芳園 MuSuBu

表紙の花嫁: (株)ディアーズ・ブレイン 徳永 彩奈さん

オモイが カタチに 変わるトキ

Masako Tsuruno

コンセプトを決めて、表現する。
伝えたい思いを形にする。その道すじとは？
オーダーメイドのウエディングを作り上げる
プロフェッショナルたちに注目します。

辻本 健輝さん&山田 朋美さん

CONCEPT: This is ME 〜宝石の街で〜

KEYWORD: キャリア、長崎、故郷

THEME COLOR: ブルー

【ふたりの想い】

画家として長崎を舞台に活躍する新郎と同じく長崎のテレビ局でディレクターを務める新婦。それぞれが生まれ育ち、自分を創り上げ、大切な人たちと出会い、一生一緒に生きていきたいと思えるパートナーに出会えた長崎という街。自分たちの原点でもあるこの街を舞台に、お世話になった人たちに心からの感謝を伝えたい。



〈お話を伺った方〉

(株) LES VOUS
代表
VOUS BRIDAL
ウエディングプランナー
鶴野 蒔咲子さん

ミュージカルや舞台で活躍していた鶴野蒔咲子さんがプランナーという仕事に興味を持ち、ウエディング業界に飛び込んだのは25歳の時。

「結婚式の聖歌隊をした時、初めてプランナーの仕事の間近で見ることができたんです。その時に見た光景があまりに衝撃的で。ある花嫁さんが結婚式の直前に緊張の

あまりうまく歩けなくなってしまって。近くにはご両親や新郎もいるのに、彼女が手を伸ばしてすがったのが担当のプランナーさん。そのプランナーさんはすぐに新婦に寄り添い、『大丈夫だからね』と声をかけていました。

新婦にとってプランナーは、両親や新郎よりお付き合いは浅いはず。それなのに真っ先に頼ったことに衝撃を受けました。たった数カ月でも信頼関係を築き上げられる関係に、とても興味が湧いたのです」

献身的に人に尽くす仕事に興味を持ち、転職。ゲストハウス、専門式場、プロデュース会社や海外でのウエディングプランナーアシスタントなどで経験を積んだ。「アメリカのプランナーは花嫁に絶対に媚びない。『そのドレス、あなたに似合っていないわ』なんて平気で言うんです。それで傷つかないアメリカの花嫁さんもさすが。双方が自分を表現するために、本音でぶつかるんです。それもお互いに真剣だからこそですよ」

繊細な心遣いでおもてなしを重視する日本スタイルと、自分を表現することを重視する欧米スタイルのプランニング。両方のよさを吸収した鶴野さんは『VOUS BRIDAL』を立ち上げ、オリジナルスタイルのプロデュースをスタートさせる。

繊細な心遣いでおもてなしを重視する日本スタイルと、自分を表現することを重視する欧米スタイルのプランニング。両方のよさを吸収した鶴野さんは『VOUS BRIDAL』を立ち上げ、オリジナルスタイルのプロデュースをスタートさせる。



プランナーの鶴野蒔咲子さんが新郎新婦の想いに共鳴し、大切な人たちの心に届けるオリジナルウエディングをプロデュース。ふたりの人生にはどんな出会いがあって、どんな経験をして、来てくれたゲストにはどんな気持ちを伝えたいのか。そのバックグラウンドをひも解き、コンセプトを作ることからプロデュースがスタートする。

<https://vousbridal.com>

鶴野 蒔咲子
Masako TSURUNO

1983年長崎県生まれ。大阪芸術大学を卒業後、ミュージカルや舞台で活躍。その後、結婚式の聖歌隊を務めたことを機にウエディング業界に転職。ゲストハウス、専門式場、プロデュース会社でプランナーとしての経験を積み、2015年ウエディングブランド「VOUS BRIDAL」を立ち上げる。17年、(株)LES VOUS設立。ウエディングプランナーとして活躍するほか、レンタル事業、イベント装飾サービス、ウエディングマネジメントサービスなど四つの事業を展開している。



鶴野さんのプランニングの特徴は、目の前にいる新郎新婦がどんな人生を歩んできて、どんな出会いや経験を積み、そこで何を想い、何を感じてきたのかを重点的にヒアリングする点。今回、紹介する辻本健輝さん、山田朋美さんで夫妻もこうしたヒアリングを経て、自分たちのウェディングを鶴野さんに託すことにしたのだ。

「おふたりは共に長崎で生まれ育ち、今も地元で活躍されているカップルです。『長崎という街は、クリエイティビティを発揮できる土地であり、宝石と呼べるほどのたくさんの価値を生んでくれた原点。この街に心から感謝しているんです』とおっしゃるその姿がとても印象的でした」

長崎を舞台に数々の素晴らしい作品を生み出し、才能あふれる画家の新郎と、地元のテレビ局でディレクターを務める新婦。そんなふたりの“キャリアと故郷”をテーマにしようと考えた鶴野さん。「会場は健輝さんの絵が初めて飾られた

場所である『長崎県美術館』。披露宴は、美術館が隣接する長崎水辺の森公園内にある『水辺の森レストラン』を提案しました。市街地から程近く、美しい自然を満喫できる環境は、長崎の魅力をゲストの皆さんにも十分に堪能してもらえと思ったんです」

さらに、プロポーズの際のエピソードも挙式の演出に盛り込んだ。

「共通の知り合いのカフェで、友人たちに協力してもらってのサプライズプロポーズをした際、健輝さんが朋美さんにプレゼントしたのがジュミリアというバラだったそう。そこで、ふたりの大切な思い出がよみがえるようにとジュミリアの花を使ったブーケセレモニーを行ないました」

美術館の美しい空間をそのまま生かすために挙式では派手な装飾はせず、白でコーディネート。ここでもふたりの会話を基にさりげないアレンジをプラス。「ブーケとリングピロー、フラワーシャワーに薄いピンクを入れました。というのも、

健輝さんが『彼女のイメージは、ほんのりとした淡い優しさ、温かさを感じさせてくれるピンク』とおっしゃったのがとても印象的で。それなら、挙式のシーンのどこかに健輝さんが感じる朋美さんらしさを取り入れたいと考えたんです」

会話の端々ににじみ出る“ふたりらしさ”を取りこぼすことなく、ウェディングのさまざまなシーンに取り入れる鶴野さん。パーティーでの装花やブーケにあしらった紫陽花にもきちんと理由が。

「健輝さんの作品の色合いにもリンクする紫陽花は長崎の県花であり、出島のオランダ商館医シーボルトが最愛の人の名前『おたくさ』と名付けた愛の花でもあるんです。おふたりにとって大切な一日にふさわしい花を選びました」

オリジナリティを重視する一方で、鶴野さんは無意味にお金をかけ過ぎていないか、ふたりよりがちな演出に偏っていないかといった点にも注視しているそう。「今回のおふたりでいうと、当初はパレ

ット型のショープレートにミニイーゼルとミニキャンバスを飾るテーブルアレンジを予定していました。けれど、コストが必要以上にかかると判断し、小物は外して、代わりにパレット型の大きなペーパーアイテムを提案。コストは1／3に軽減できたのです。こちらから提案したこともあり、とても喜んでもらえました」

ゲストが参加できる演出を設けるのも鶴野さんのこだわり。

「今回は、新婦のカラードレスの色を当てる『色塗りドレス当てクイズ』を取り入れました。パレット型メニューの裏面にドレスのイラストを印刷し、ゲストの皆さんにお色直しのドレスを想像しながら色を塗ってもらうんです。さすがはおふたりのゲスト。皆さんとっても楽しそうに手を動かし、それぞれが描いたドレスの絵はどれも高いクオリティ！

お色直しの入場で“正解”のドレスを着た朋美さんが登場すると、『さすが朋美らしい！』『そうきたか！』『似合うよー！』

と一斉に歓声が沸き起こって。そうした声掛けは一日の間に何度もあり、いかにふたりが多くの方たちから慕われ、愛されているかが分かりました」

この結婚式を通して、「きっとゲストの皆さんはさらにおふたりのことが好きに

なり、おふたりもまたゲストの皆さんのことをもっともっと好きになるに違いない」、そう確信したという鶴野さん。

「まさに、想いが伝わり合う結婚式。私が理想とする形が見えた、自分にとっても思い出深い一日でした」

挙式会場

画家である新郎が初めて自身の絵が飾られた場所である長崎県美術館が挙式の舞台に。建築家の隈研吾氏が手掛けただけあり、空間としても素晴らしく、ふたりにふさわしいセレモニーの場となった。

披露宴会場デコレーション

披露宴では、新郎が長崎の街をテーマに描いた『宝石の街』をメインビジュアルにデコレーション。装花は絵画の色合いに合わせ、ブルーの紫陽花をメインにアレンジ。6月のウェディングだけに季節感も演出することができた。

挙式会場デコレーション

ロケーションそのものが特別なので、装飾はシンプルに。使ったのは布と真っ白なバージンロードのみ。

演出

ゲストもパーティーに参加してもらえる演出をと、お色直し用ドレスの色当てクイズを実施。単に色を言い当てるのではなく、中座の時間を利用してゲストに想像するドレスの絵を色鉛筆で描いてもらうなど、ゲストに飽きさせない工夫も。

□クリエイター紹介 挙式会場：長崎県美術館／披露宴会場：水辺の森レストラン／フォトグラファー：斉藤幸城
ヘアメイク：高谷里美／フラワー：Flower Design Flow 衣装：ヴァンクルール

「立ち止まらないで、考えよう！」 叱咤激励していた緊急事態宣言発令期間

弊誌ディレクター桑田和代がウエディング業界で注目を集めるキーパーソンにインタビューする本コーナー。今回は(株)テイクアンドギヴ・ニーズ、ウエディングデザイナー・ドレスプロデューサー・バイヤーの野上ゆう子氏にお話をお聞きました。第一子の出産のため、今年10月半ばから産休に入っている野上氏。コロナ禍の2020年に考えたこと、プレ両立WOMANとしての心境についてお聞きました。

(株)テイクアンドギヴ・ニーズ
ウエディングデザイナー
ドレスプロデューサー・バイヤー
野上 ゆう子 氏



野上 ゆう子
Yuko NOGAMI

(株)テイクアンドギヴ・ニーズに2004年入社。10年よりHaute couture Designメンバーとして国内外のセレブリティウエディングをプロデュース。14年のドレスショップ「MIRROR MIRROR」の立ち上げより、プロデューサー兼バイヤーも務める。女性としての働き方やライフスタイルも注目され、テレビや女性誌の取材、講演など多方面にわたり活躍。

コロナ禍においても 提案力と発想力が物事を広げる

桑田 野上さんはこの半年あまり、どのようにウエディングのことを考え、何に取り組みながら過ごしていたのですか？

野上 今、結婚式を延期するカップルは多いけれど、今後も結婚式がなくなることはないと、私は思っています。リモートでできることではないので、カップルは必ず戻ってくるはずですよ。

私が携わるオートクチュールウエディングはチームが小さいので、この状況下でも挑戦できるメリットがあります。今は、対応すべきことを粛々とやり、これまでのように結婚式を行なうときはすぐに動けるよう、変わらず用意をしています。ソーシャルディスタンスウエディングや小さな規模のパーティーを何度も行なうなど、形を変えればできることを楽しんで発案し、「やっぱり結婚式はいいね」と感じていただけるように、攻めていきたい。

ですから今は、たくさん勉強してインプットし準備しておく時期。今後のことは心配していません。

事実、前撮りだけで100万円ほどかける方や、大きな結婚式の代わりにおふたりだけのデート結婚式のプランで250万円の予算を組む方なども現れています。今の環境をつかんでアプローチしていかけるか。提案力と柔軟な発想力が物事を広げていくと思います。

緊急事態宣言中は、企画力を高めるためのインプットやアウトプットのトレーニングをしたり、こんな時代からこそ不安に思うお客さまにお花を配りに行ったり、リモートでのワークショップを企画したりなど、少しでもできることを探して実行しました。チームには「自粛中でも、私たちだからこそ提供できるサービスを考えよう！」と叱咤激励していました。

アニバーサリープランナーの 突破口を作りたい

桑田 今後は、どのようなことに取り組んでいきたい、いくべきと考えていますか？

野上 オートクチュールウエディングで密接な関係をつくったお客さまと、一生のお付き合いをしていきたいです。今は、SNSのDMやコメントを通じて、なかなか会えなくてもつながり続けることが簡単になりました。担当したカップルのマタニティやニューボーンを投稿で知ったら、お祝いに駆けつけたいと思いますし、その時に求められればすぐに応じられるような、サプライズも含めたアニバーサリーパッケージを作っていきたいんです。お客さまは、こちらからアプローチさえすれば増えていくことを実感していくようになったので、そこに労力を使っていきたいです。

私たちのセンスや情熱を見込んでウエ



緊急事態宣言中は不安に思うお客さまに花を配りに行ったほか、メンバーと共に提供できるサービスを考えるなどして、それらのアイデアを惜しみなく実行していた



10月半ばに出産の予定の野上氏。旧新オートクチュールメンバーにウエディングの経験を生かしたコーディネートで、ベビーシャワーを開催してもらう

ディングを任せてくださったのだから、アニバーサリー以外にも、自宅のインテリアや植栽といった、さらにその先のサービスの提供につなげていける可能性を感じていますし、それこそが他社との決定的な違いになるのではと考えています。

どの企業も、「人」で差別化しようとしていますが、その違いをお客さまに分かるように示すことは難しい。でも、人と人が商売を超えてずっとつながっていることを実証すれば、信頼を生み出せると思うのです。そう在り続けることが、今後の目指すところです。

ウエディングプランナーの仕事は、最終的に人と人との信頼関係を築くこと。その関係が当日で終わるのももったいないですよ。ウエディングで築いた基盤があるので、つながりのあるアニバーサリーの演出もすぐに提案できる。「あの人たちに頼めば何でもやってくれる」。そんなアニバーサリープランナーという仕事があってもいいと思うのです。まだ概念ができていないから、突破口となる概念を作れたら、と思っています。

自分が納得できる生き方が目標

桑田 本誌が刊行される頃にはお母さんになっていらっしゃるんですね。子育てと仕事の両立に対して、今思うことを教えてください。

野上 11月末に規模の大きな結婚式があるので、出産直前まで仕事をして、産休中も完全に休むのではなく仕事もします。施行の最終チェックもして、当日も立ち会う。どうにか両立しようとしています。

出産を経ても自分は変わらない。せっかちなものもあるし、チームの皆も心配だし、オートクチュールウエディングが止まってしまうのももったいないから、1年半も止まっていられない気がして。

ですから、どう両立するかに挑戦して、スーパーワーキングママになる方が自分らしいと思っています。不安もあるけれど、いろいろな人の手を駆使して、自分が納得できる生き方、「やっぱり野上さんはやりこなせていたね」となることが目標です。周囲のワーキングマザーを見ても、ずっと一緒にいることだけが子どもの幸せではなく、仕事と休みのメリハリがあるのもいいな、と。

「ママはこういうふうに働いているけれど楽しそう」「いろいろな人のためになって頼られていいいな」というのを子どもに見せたい。だからチャレンジしていきたいです。

これからは共働きの時代でしょう。女性のキャリアの悩みに対しても、一つのロールモデルを見せられたらいいなと思います。

会社のメンバーやチームが頼れること、「そういう野上でいい」と言ってくれる環境があることも大きいですね。加えて、お

客さまとはリモートで打ち合わせできることが当たり前になったので、いい時代になりましたよね。

覚悟を決めて向き合った経験が 次の道をつくる

桑田 野上さんのお話を伺っていたら、前向きな気持ちになれました。全国のプランナーさんに、ぜひメッセージをお願いいたします。

野上 今、世の中が大変で心配していても、二年後にどうなっているかはよく分かりません。世の中が普通に戻って挙式数が爆発的に伸びているかもしれない。結局、今、自分たちがすべきことやできることを模索しているのは、業界にいる誰もが一緒なんです。その中で喜んでもらえることを考え、挑戦すること、今どうすべきかを研ぎ澄ますことが重要だと思います。

迷っても、向き合うことで得られることは絶対あると思う。私はオートクチュールウエディングでいろいろなドレスショップに帯同した経験が、MIRROR MIRRORの立ち上げで役立ちました。無駄なことは一つもなかったと、後輩たちにもはっきり伝えていきます。

やってみようと思ったことに覚悟を持って向き合ったら、そこで見つけたものが、必ず次の道を作ると思います。